



令和4年度宮城県立支援学校女川高等学園
寄宿舎自治会・防災活動記録
継承～経験・知識をつなぐ～



～もくじ～

- ①総合防災訓練・各自治会 1
- ②環境整備班..... 2
- ③総務班 4
- ④給食給水班..... 5
- ⑤救護班 7
- ⑥安全点検班..... 8
- ⑦広報班 10～16

～女川町インタビュー東日本大震災から11年・防災について～

～本校の防災の取組について～



自治会活動

女川高等学園は、東日本大震災で大きな被害を受けた女川町にあり、日常生活の中で「もしも災害が起こったらどうするか?」ということで、生徒全員がその考えと向き合うために、「自治会」という組織を作り、次の災害があったときに備えて勉強を積み重ねています。

総合防災訓練

総合防災訓練では、私たち生徒が災害にまきこまれる体験や、災害にあって困っている人を助ける体験をします。その体験を通して、災害時に自分でできることや、お互いに助け合うことの大切さを学びます。

令和4年度『総合防災訓練』のテーマは「継承」。震災から11年を新たな想定を含む様々なリスクを各自治会班で防災・減災という観点で取り組みました。

【環境整備班】

地域で想定される災害を知り、早期避難の必要性を理解するために、実際に災害を想定とした体験や映像・説明を聞きながら知識を深めました。

① 夜間の浸水歩行 ～体験～



実際の夜間の浸水を想定し、体育館のステージを暗くしました。そのため、懐中電灯を持ち、周りが見えにくいこと、浸水による歩きにくさを同時に体感する学びでした。

② 津波の高さを知る ～知識・見学～



新しい津波の浸水想定を発表で女川町における津波の予想の高さは「20.3m」となっており、体育館で示しているのが10mのため、倍の高さの津波がくる想定について説明を聞き、実際の想定について知識を深めました。

【環境整備班】

③ 浸水歩行「水の抵抗」 ～体験～



体育館にて、「ブルーシートに穴をあけ、足にはおもりをつける」という歩きにくさを体感するために準備しました。また、送風機とおもりを使い、浸水時に避難するときの風と水の抵抗を体験する学びでした。

④ 津波の速さを知る ～知識・説明・映像～



津波の速さを知るために、映像を見ながら説明を聞き、津波の速さと怖さを学習しました。

◆総合防災訓練を通して学んだこと(まとめ)◆

夜間と日中の浸水訓練は、暗いだけでも歩くことが困難であることに気づきました。また、津波による浸水について高さや速さを知ることができました。

総務班

感染症対策を講じた避難所の設置・準備の行程を学び、実践する。

① 避難所運営訓練 ～仮想の世帯ごと～



総務班の生徒が呼びかけを全体にし、避難者役の生徒・職員を仮想の世帯ごとに分けている様子です。

② 避難運営訓練 ～感染症対策を講じた受付対応～



感染症対策を講じた受付で対応している様子です。他人との距離に気をつけながら対応をしています。

③ 避難所の運営訓練 ～不調者対応～



不調や症状によって、避難場所を分け、その場での待機も含めて対応をしています。

給食給水班

給食給水班は、コロナ禍で自粛していた炊き出し訓練を再開。校内備蓄食料を配付し、ローリングストックについて学びました。



①炊き出しの様子

当日参加者の136食分の豚汁の炊き出しを準備しました。食材の調達、調理など生徒と職員がともに協力しながら作りました。



②総合防災訓練での昼食

総合防災訓練での昼食は、アルファ米、クラッカー2種類、カンパン、お茶、豚汁、お水を全生徒へ配付しました。

【給食給水班】

③ 給食給水 ～炊き出し・配食訓練の様子～



各世帯に、食事を配っています。感染症対策として、各世帯に分かれているところに、配りました。



◆総合防災訓練を通して学んだこと◆

今年、コロナ禍前に行っていた炊き出し訓練を行いました。136杯分を朝から準備し、配食と合わせて生徒・職員に配ることができました。

救護班

症例に合わせた処置内容を考え話し合い、応急処置を施す。

① グループにわかれ動画視聴 ～災害時の傷病～



災害時の傷病の手当ての仕方について、グループごとに動画を視聴しました。

② グループごとに話し合い

～傷病の状態や置かれた状況、必要な処置を考える～



グループごとに与えられたテーマ（傷病の状態や置かれた状況）を読み取り、必要な処置をそのグループで話し合います。

③ 処置の道具を考える ～道具を使用し、処置の疑似体験～



話し合いをもとに、見本コーナーにある道具を活用し、実際に想定した疑似体験を行います。

【安全点検班】

“防災ウォークラリー”と称し、校内4か所の訓練会場を巡りながら、体験を通して防災に関する知識を学びました。

① 安全点検 ～身近に潜む危険を探せ～



“生活訓練室（1Kのアパートと同じ造り）”を利用し、災害が起きた際にどこに布団を敷いたら安全かをグループごとに話し合い、実際に布団を敷きながら安全を確認しました。

② 防災グッズの紹介 ～備えあれば憂いなし～



非常時に役立つ防災グッズの紹介と、実際に触れて使うことで有用性について実感することができました。また、防災グッズの名前を聞きながら覚えていました。

【安全点検班】

③ 浸水ハザードマップ ～もし津波が来たら～



R4年5月に発表された新想定の新津波浸水域を元に、県内の沿岸地域を中心としたハザードマップを作り、説明・展示しました。自分が住んでいる地域の安全性・危険性について理解を深めることができました。

④ 防災〇×クイズ ～知識を深めよう～



防災に関するクイズを安全点検班が考え、他の班に分かりやすく教えていました。

◆総合防災訓練を通して学んだこと（まとめ）◆

私は、防災訓練で防災グッズについて学びました。防災グッズがあるとなんでも揃っていて、災害時に役に立つ物なので家庭に帰った時に防災グッズを用意したいと思いました。

女川町内へのインタビュー

～あの日からの10年、これからの10年について考えておくべきこと、備えること～

広報班では、東日本大震災での経験やそこから得た教訓等を知り、それを広めるために、女川町内を中心にインタビュー活動を行ってきました。

Q:東日本大震災当時の経験や大変だったことを教えてください。



広報班



おかせい
亀田裕 様

(震災時は石巻にいましたが)当日中に女川に来ることはできませんでした。車内で一晩過ごしました。翌日、石巻線の線路を歩いて女川まで来ました。避難先になっていた病院や体育館で家族を探しましたが見つかりませんでした。社長宅で4日間ほどお世話になりながら、家族を探しました。大変だったことは、食糧や水の確保と道路状況です。



小さな珈琲屋さんGEN
佐藤雅裕 様

当時は役場職員でした。想定以上の津波で、役場庁舎の4階まで津波が来ました。町民も来ていたので、屋上に案内するのが大変でした。消防ホースを使って一人ひとり屋上に上げました。雪が降っていたので、役場にあるものをかき集めて雪や風から守るのが大変でした。また、電話が繋がらず、他の職員と連絡を取り合えなかったのが苦労しました。



女川町長
須田善明 様

当時は町議会議員でした。女川町の被災状況がわからず、情報をとることも流すこともできず、大変でした。(町長として)大事なことは“判断する”ということです。迷っていても迷わず判断することが大切だと思っています。不安は迷いが伝染してしまいますし、もし違う判断をしたらすぐに撤回して正しい判断をすることが大事だと思います。



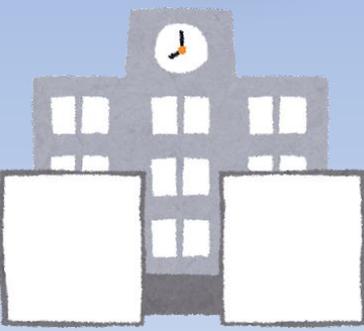
養殖業
阿部正浩 様

作業が終わり、自宅の茶の間で休んでいた時に地震がありました。今までにない規模の地震で、間違いなく津波が来るだろうと思いました。消防団員でもあったので、近所の人たちにも声掛けし、消防車で警らもしましたが、身の危険を感じ、消防車を置いて逃げました。海を見ていたら、すごい引き波があったので、これは確実に津波が来ると思い、山の方に逃げました。普段から見ている山ではありましたが、実際に立ち入ったことはなかったので、見える景色も違って迷いそうになりました。山の上から自分の船を見ていましたが、津波が押し寄せてきて船が傾いている所までは見ましたが、正直船どころではないという状況でした。(その後船は助かり、現在も使用しているそうです。)



女川高等学園前校長
須田一憲

当時、本校と同じ場所にあった女川高校に勤務していました。教職員の車を全部高い所にある第2グラウンドに移動しました。雪が降っていてとても寒く、住民も避難してきたので、車の中で暖をとりました。幼い姉弟と思われる子供が髪を濡らして震えていたので、私の車に乗せたのを覚えています。校舎は穴が空いていたり、体育館は壁が天井から落ちてきたりしていたので、余震に耐えられないと判断し、避難所としては使いませんでした。(当時あった)武道場にも町民や教職員が避難しました。武道場に畳を引いて、校舎・体育館にある暖をとれる物はすべて持ってきました。体育館にあった暗幕や紅白幕は布団替わりにして使いました。町民は最終的に160人程避難し、武道場はいっぱいになりました。桜館(現・白亜館)に帰れない教職員が寝泊まりしました。



Q:災害への備えについて教えてください。



広報班



女川町長
須田善明 様

(町としては)基本的には他の自治体でやっていることと同じです。新しい街づくりで大切なことは災害を減らすこと。町の作り方が災害の被害を減らすことを意識しています。また、『以前ここまでしか来なかったから大丈夫』という先入観が被害を増やしたと考えています。出来るだけ高いところに逃げるのが大切だと思います。



女川消防署
須田慎也 様

女川消防署独自の取組ではなく、石巻広域消防の取組として、災害が発生した際、いち早く対応するために、職員一人一人の行動をマニュアル化(庁舎被害の確認・車両の移動・ライフラインの確保等)し、地震や津波を想定した訓練を定期的に行い、次の大きな災害に備えています。また、災害時に使用する装備・資機材(救命ボート・応急手当用資機材等)を素早く準備する訓練も行っています。

高台に避難
してください





小さな珈琲屋さんGEN
佐藤雅裕 様

基本的に国道を5mかさ上げしています。昭和30年に『チリ地震津波』があって、その津波をすべて防げるようになっていました。東日本大震災クラスになると、ここは浸水区域に入るので、すぐに逃げるようにお客さんを誘導します。その際は、山の方へ、“(高さの)終点がない所へ”逃げます。



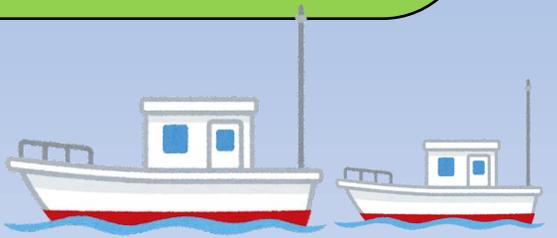
おかせい
亀田裕 様

町の訓練とお店のマニュアルです。まず、お客様を優先して高台へ避難させることを一番に考えています。災害があってほしくはありませんが、リアス式海岸のため、いずれまた(津波が)くるものと思います。引き波の力が強いことも忘れてはいけないと思います。地震、津波に関しては避難するのみですが、台風などの災害時は物が飛ばされないように対策をしています。



養殖業
阿部正浩 様

(操業中は)地震の規模にもよりますが、陸に上がって逃げられる状態ならば陸に逃げますが、震災クラスの津波では引き波もあり、陸に上がれないと思います。その場合、波と一緒に沖に行くしかありません。状況に合わせるしかないかもしれません。実際には選択肢はないと思います。また、船には基本的には漁具を置くスペースしかないのので、飲み物程度は持ち込みますが、防災用品等は常備していません。ほとんどの人がそうだと思います。



Q:災害時に、『これだけは備えてほしい』ということ
はありますか？



広報班



小さな珈琲屋さんGEN
佐藤雅裕 様

一般的には家に水を備蓄し、停電になれば電気も必要になります。それから大切なのは、“自分自身が必ず必要な物”。例えば薬がそれに当たると思います。震災当時は、すぐに自衛隊が来てくれたこともあり、また様々な支援もあったので、実際に食料や水に困ることはそれほどありませんでした。また、避難所になる地域の集会所に食料や水の備蓄、発電機もあるので、なおさら、自分自身が必ず必要物の準備が大切になってくると思います。



女川消防署
須田慎也 様

災害時に会社や学校、自宅から避難できる場所の確認をしておいて下さい。災害が起きた時は、1秒でも早く安全な場所に避難することが重要です。女川町には女川町が定めている指定緊急避難場所・指定避難所があります。女川町ホームページにて確認することができますので、避難先を確認しておいて下さい。また、自宅に飲料水や非常食等の非常持出品を準備しておく、災害時すぐ避難することができます。



女川町長
須田善明 様

防災グッズや持ち出し袋も必要だと思いますが、今はバッテリーを持っていくことが一番重要だと思っています。情報を取れる体制は大事だと思います。また、いつ何があっても行動できる心構えも大事だと思います。自分だったらどう思うか、どうすればいいかを心掛けることが大切だと思います。



Q:女川町の復興や魅力、今後についての思いをお聞かせください。



広報班



(株) 御前屋
佐藤広樹 様

“どうしたら”、“どこまでが”復興なのかはわかりませんが、まずは元に戻すことだと思っています。時間を大切にして、一日一日、目の前のことをやってきました。お店を建てた時から“人”を大切にしてきました。いずれはAIや機械などにとって代わられることも多いと思いますが、“人間にしかできないこと”、“心”をもって心豊かに感動を届けていきたいと考えています。



おかせい
亀田裕 様

復興に関しては、他の市町村よりも早いと感じます。町長が頑張ってくれているし、若い人も頑張ってくれていると思います。



小さな珈琲屋さんGEN
佐藤雅裕 様

海もあり、山もあって、今ではきれいな町になったと思いますが、一番いいところは“人”。いつ、どこに人が来ても常にウェルカムな感じがいいと思います。ある一定の街づくり、建物などのハード面の復興はある程度できたと思います。あとはソフト面で『津波を見たくない』という方がいたり、全国的にもそうですが人口が減っています。この町の良さをPRして、若い人達につないで、人口を横ばいにする工夫をしていかなければならないと思います。

町役場





女川町長
須田善明 様

僕たちだったら乗り越えることができると思います。町民と一緒に協力してきたから出来たことだと思います。自分の街だから自分で立ち上げる。正解かどうか分かりませんが、少しでも参考になったらいいなと思っています。それから、震災遺構を見てもらいたいですね。大変なことがあった、そしてそこからどう立ち上がってきたか、ということ伝えていきたいです。自分が立ち上がらないと始まらない。人の心の強さを見てもらいたいです。

震災直後から被災地の復興ボランティア活動『東北支援プロジェクト』を継続してくださっている大阪府立堺工科高校の保田光徳先生からお話を聞くことができました。



広報班



大阪府立
堺工科高等学校
保田光徳 様

(女川町は)被災地の中でも復興が早かったイメージがあります。特に、町長さんが頑張られていた印象があります。震災後すぐにこちらに来ましたが、当時と比べればトラックの数は圧倒的に少なくなりました。かさ上げ工事を含め、年々復興している印象はありますが、ただそれは『見た目だけ』とも思っています。仮設住宅がなくなり、復興住宅もできましたが、『お年寄りの方がさびしいやろなあ』と思っています。仮設の時は『集会所』があり楽しそうに見えた。マンションのような作りの復興住宅でそういうところが減り、交流がなくなっているという話は聞きます。見た目の復興は進んでいます、心の中ではつらいこともあるのだろうなと思います。そういう意味での復興は『まだまだ』と思っています。

